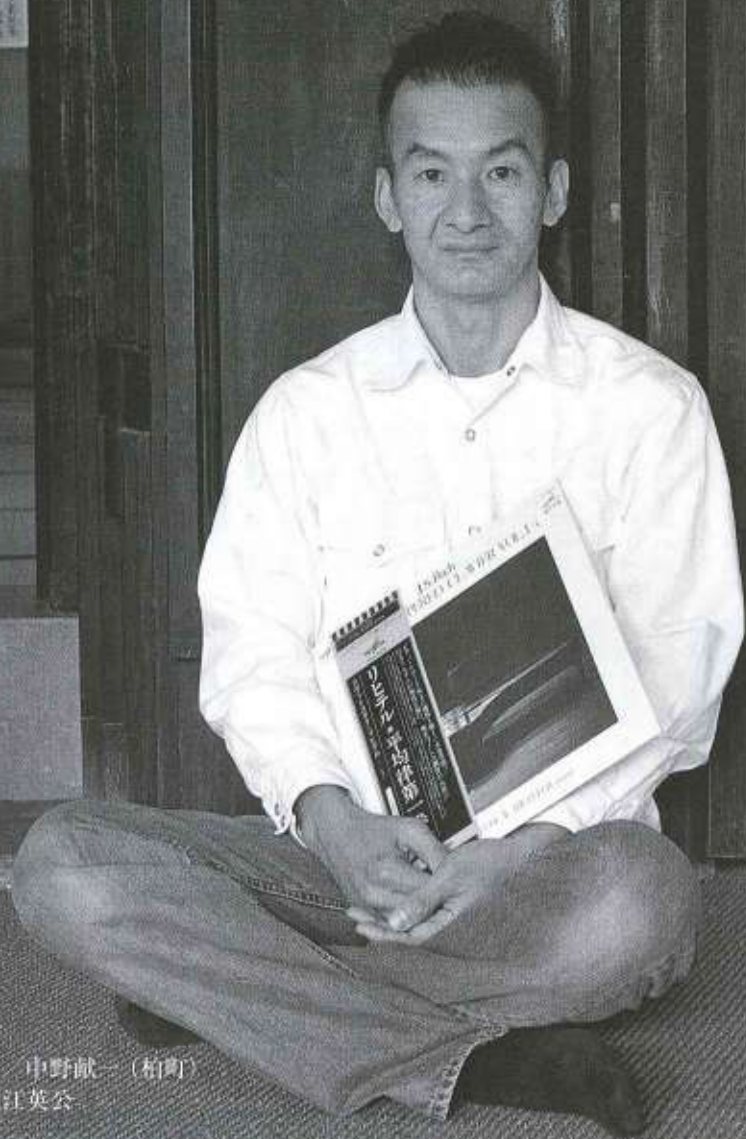


えくてびあん

5/6

立川と語ろう 立川に生きよう
MAY & JUNE 2002
EKUTERIAN Vol.20 No.214/215



表紙の人 中野献一（柏町）
撮影 網江英公

砂川深層

4

案内人・豊泉喜一

写真・五来孝平



築後150年以上、総けやき造りの拝殿

重い水盤を支えている4人の唐子は力持ち？



このお社には、
安産の神様「水天宮」、
夷寇の守り神「重影神社」、
などが合祀されている



昨年、鎮座370年記念事業で
整備された境内

立川最古の木造建築

この社を砂川では「あずさみてんじん」と呼ぶ人が多く、学問の神様・菅原道真を祀る「天神様」とよく間違えられる。だが此処の祭神は、医薬・息災延命の神として名高い「少彦名命」すくひなのみことで寛永六年（一六二九）、現・瑞穂町の阿豆佐味神社から分社、この地に鎮座されてから今年で三七五年になる。

無人の原野であった砂川に初めて六人の百姓が入植してからわずか二年後、厳しい条件の下で開拓に従事する人たちの心の支えとして勧請されてより、砂川の発展を見守りつづけてきた鎮守様である。

本殿は元文三年（一七三三）頃に建築されたものと見られ、昭和四五年には立川市有形文化財に指定されている。諏訪神社が焼失してしまっただけで立川最古の木造建築として貴重な文化財である。また現在の拝殿も嘉永年間（一八五〇頃）に築造された総けやき造りの豪壮な建物。昨年には鎮座三七〇年記念事業として鳥居や参道等の境内整備も終わり、一段と風格を増した。

此処にもう一つの貴重な文化遺産がある。正面拝殿の右奥に四人の唐子が片膝をつき水盤の四隅を担ぐ、全国でもあまり例を見ない手水鉢がある。この手水鉢は幕末の弘化三年（一八四六）八月、砂川村三番組出身で当時の品川宿で財を成した小山奥左衛門が願主となって寄進したものである。製作したのは鶴見邑（現・川崎市）の石工・飯島吉六で、正面に「漱盤」と刻まれている。「漱」という字は「口をすすぐ」という意味。製作以来、百五十年余りの長き歳月が経過しており、風化を避けるため今の場所に移され保存されている。

現在、境内には水天宮、重影神社など十社が祀られている。



熟年スポーツ「ミニテニス」。 これ、立川生まれ、立川育ちなんです。

ミニテニスプロ 天野孝一さん

啓介 今、全国でミニテニス愛好者というの、どのくらいいるんですか。
天野 競技人口としては三万人ぐらいです。都道府県それぞれに協会の組織ができてまして。全国大会も今年で六回目に なります。

啓介 ええ、もうそんなに。
天野 ええ。今年十一月に岐阜で開かれるんですけども。ちなみに去年は宮崎でした。

啓介 今や全国に広がっているわけですね。でも、もともとは天野さん個人が考案されたものでしょうか。そもそものきっかけは何だったんですか。
天野 昭和六十年頃ですか、私が教育委員会に勤務してまして、私が教育委員会で泉体育館に勤務してまして、クロースアップされていましてね、立川市も中高齢者の健康づくり、体力づくりという取り組みが盛んになっていまして、

啓介 昭和六十年頃ですか、私が教育委員会で泉体育館に勤務してまして、クロースアップされていましてね、立川市も中高齢者の健康づくり、体力づくりという取り組みが盛んになっていまして、



■天野孝一(あまのこういち) 昭和15年生まれ、日本ミニテニス協会理事長。生涯スポーツとして全国的に人気を集める球技「ミニテニス」の考案者であり、現在世界でただ一人のプロ・プレイヤー。少年時代から野球、卓球、テニス、ボクシングなど多くのスポーツに親しんできた天野さんは、昭和35年から立川市役所勤務。昭和55年の泉体育館オープンと同時に同館勤務に移り、市民のスポーツ振興、特に高齢者向けのスポーツ定着化に取り組む。その後、立川市議会議員を経て、現在ミニテニスの普及・指導のため全国を飛びまわる日々を送る。立川在住。
■立井啓介(たていけいすけ) 本誌編集人。

すよね。

天野 おっしゃる通りです。道具にしても、最初は既存のスポーツで使用しているものを使っていたんですが、専用ボールを業者に作ってもらえるようになるまで、七、八年かかりました。

啓介 競技のルールについてはどうですか。野球だってあれだけ歴史があるスポーツなのに、今シーズンからストライクゾーンが変わった、なんて云ってるんですよ。

天野 当初は、年中ルールの改正がありました。年々、競技者のレベルが上がってますから、ルールも変えざるを得なかったんですね。でも、ここに来てようやく落ち着いたという感じですね。十五年かかりましたね。

啓介 天野さん、市議会議員をされてました。あれもやはりミニテニスの普及が念頭にあったんですか。

天野 やはり役所に勤めていますと、なかなか自由が利かない。それに自分で考案したスポーツを普及させたい気持ちはあるのに、立场上そうはいかない。で、思いきって市議会議員に立って、その方が

スポーツ普及に役立つことが出来るんじゃないかと思っただけですが、いざ議員になったら、なおさら忙しくなっちゃって(笑)。

啓介 見当が違った。

天野 どうも私の性分には合わなかったようですね。私自身、政治の世界で経験したことは勉強になりましたが、議員として純粋にスポーツの普及だけに取り組みれば良かったんですが、ミニテニスを広めたいという目標がありながら、議員という仕事の中で拘束されるものが生じた時、それは苦痛でしたね。どうしてもそちらに引張られてしまうのが耐え難



なっていたんです。それで私が担当なんですから、何とかしなきゃと試行錯誤を始めたのがきっかけでした。

啓介 もともと高齢者のためのスポーツということが始まりましたか。

天野 そうなんです。で、自分がこれまで教育委員会の仕事を通じて経験してきたバドミントン、卓球、テニス、こういったものをミックスさせてみたかどうか。

啓介 ああ、僕も競技を見たことがありませんけれども、云われてみればそんな感じがしますね。

天野 そもそも体育館に来る人というのは黙っていてもスポーツをしに来る人です。しかし、行政の目的としては体育館に来ない高齢者の方に、如何に体力づくりをしてもらうかということだったんですよ。そこでスポーツの「出前」というのを始めまして。

啓介 出前ですか。

天野 ええ。昭和六十一年の五月から、「巡回シルバークラウド健康体力づくり教室」という長い名称なんです(笑)。それで市内の公園や公民館などを巡って、そこに集まった人たちに教えていくんですね。最初はビーチバレーの大きなボールを、手のひらで打ち合うという形です。

啓介 あ、最初はラケットではなくて。

天野 そうなんです。で、錦町、次に若葉町、柴崎町と巡っていくうちに、少しずつ自分の頭の中で考えていたものを出していったんです。短いラケットを用意

かったんです。

啓介 で、議員を辞められて。

天野 ええ。で、もうその頃はミニテニスの全国的な高まりというのを感じていましたから、これは自分が各地を巡って指導していけば愛好者が増える、プロとしてやっていけるという見通しが出来たんですね。それで議員を辞めて、すぐにプロ宣言をしたんです。

啓介 そうだったんですか。でも天野さん、もし自分がミニテニスというスポーツを「発明」していなかったとしたら、これは全く違う人生を歩まれていたでしょうね。

天野 そうですねえ、まさに自分は公務員で、六十歳の定年退職まで市のために働かせてもらって……と。そういう計画だったんです(笑)。こうなるとは自分でも思いませんでしたよ。

啓介 この道の第一人者としてご苦労も多いことでしょうけど、もう諦めようと思ったことはありませんか。

しまして、スーパーで買って来た小さなボールを打ち合うような形にしていって、こんなスポーツを考えたいんですけど、皆さんどうですかと云ってやってみたら、これがとても受けた。凄く反響だったんですね。

啓介 なるほど。卓球やバドミントンよりも簡単そうですね。特に高齢の方にはとつきやすい。現在のミニテニスの原型が生まれたわけですね。

天野 そういことなんです。これはもうテニスの小さい形だから「ミニテニス」って名前をつけちゃおうかとなりまして、それから一年もたたないうちに「巡回シルバークラウド」が「ミニテニス教室」という風になっていったんです。

啓介 当時は、高齢者のスポーツといえば、ゲートボールぐらいだったでしょう。ミニテニスが出てきて「これだ！」って思った方も多かったでしょうね。

天野 そうですね、予想外に受け入れられました。市内に愛好者が増えてグループがどんどん出来てきて、それで平成二年に、立川市ミニテニス協会というのを設立したんですね。ちなみに二番目に協会が出来たのは、長野の長野市なんです。

啓介 あ、立川と姉妹都市ですね。

天野 ええ。それに当時、高齢者向けの新しいスポーツということで、テレビや新聞などでもよく取り上げられました。そんな感じで広がっていったんです。

啓介 やっぱ全国的に需要があったんだと思います。でも天野さん、簡単に考案したっていいけども、スポーツにはルールというのがあるでしょう。競技の規則だけではなく、例えばボールやラケットなど、使用する道具の規格決めとか。そういうものもゼロから作られたわけ

天野 いやあ、それはなかったですね。むしろ喜びの方が大きいんです。全国を巡って指導をさせていただいてる中で、皆さんが「こんな面白いスポーツを教えてください」と目の色が変わってくる、その喜びはすごくありますね。特に高齢の方がバリバリと、生き甲斐をもって参加してくれる。それは本当に嬉しいです。

啓介 若い人たちに広げようというお気持ちはないんですか。

天野 ええ。やはり、中高年の方の生涯スポーツという位置づけは守りたいんですね。「天野の目の黒いうちは、若い人間には勧めない」と思っています(笑)。

啓介 そうですか(笑)。いやあ、でもこれからミニテニスのごまごま広がるか、さらに楽しみです。

天野 第十回、平成十八年の全国大会は東京ドームで開こうという計画になってるんですよ。それに来年あたりから、台湾や中国、マレーシアなどアジア諸国への進出も考えています。

啓介 立川生まれのミニテニスが世界のミニテニスに、いよいよ壮大になってきましたね。

Table listing various businesses and their addresses in the area, including KIT'S SHOT BAR, こむろ 酒店, 矢沢 歯科眼科, etc.

えくてびあんの輪 (Ekyutebi-an no Ring) logo and text: 人があて、街があります。あなたがあて、立川があります。そこにちょっとだけ、えくてびあん！

Table listing more businesses and their addresses, including あら井 鮎 総本店, 三田 花店, KIRIN COFFEE, etc.

聴覚障害なんのその

わがパリダカ走行記

「冒険の扉を示そう。そこには、あらゆる困難が待ち受けているだろう。扉を開けるのは君だ。望むなら連れて行こう」。

1979年、故ティエリー・サビーネの提唱により始まったパリ・ダカールラリー、通称「パリダカ」。

アフリカの大地をおよそ2週間かけて走破、雄大な自然を相手に

自らの知力、体力、精神力のすべてを駆使して臨む世界一過酷なラリーだ。

2001年12月、この冒険ラリーに聴覚障害を持つ日本人として初めて挑んだのが田村 聡さんである。

生まれつき負ったハンディをものともしない果敢なる挑戦。

初参加の上、健常者には思いも寄らぬ困難が次々と眼前に立ちはだかったが、

それらひとつひとつの壁をクリアし、念願のパリダカに臨んだ。目標は、全14ステージの完走。

だが、第10ステージにさしかかったとき痛恨のマシントラブルに見舞われてしまう。

体力、気力をゴールまで持続させる自信はあった。

自力で修理を試みたがフランスでレンタルしたオートバイに持参した工具の規格が合わない。

全行程9,500kmのうちゴールまで2,000kmの地点、

広大なサハラ砂漠の真っ只中でついに自ら決断を下した。

「無念のリタイア」。

だが、目標はあくまでも完走。

2年後をターゲットに田村さんはすでに準備を始めている。

コースは、ラリー開催時の地形の変化、
通過国の社会情勢を考慮して決定される。

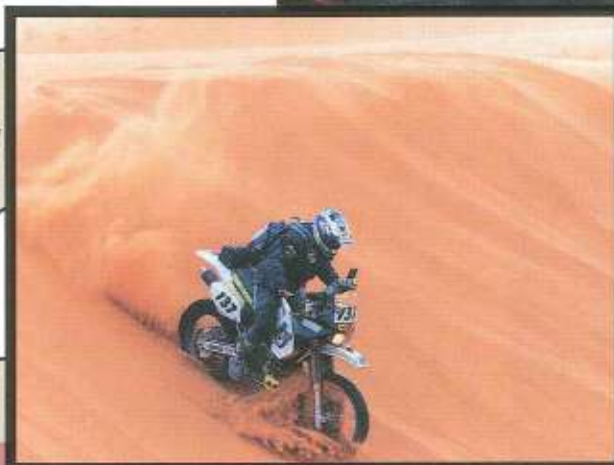


地雷地帯を知らせる石塔
(夜間は灯が点る) 毎回復
になって初めてこの意味が
判り、背筋が凍る思いがし
たという。

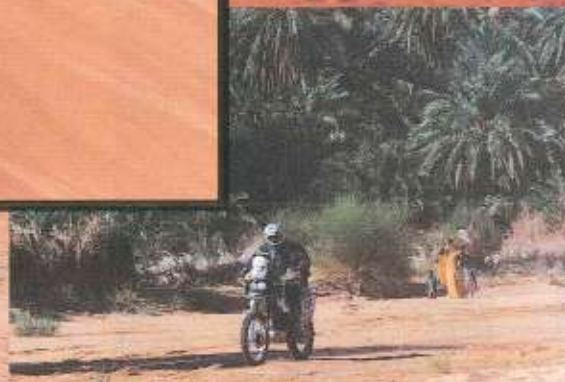
●田村 聡 (たむらさとし)

昭和40年生まれ。神戸在住。

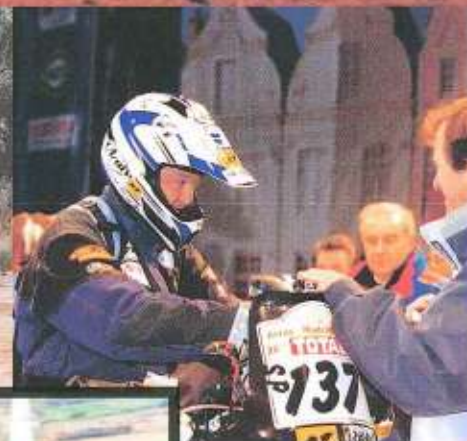
生まれつき聴覚障害というハンディを持つ息子を父親は自然の中へと連れ出した。聡さんが中学2年の時である。「山はいいな」。以来、休みの度に山林を歩きまわった。そして一昨年、ついに「日本百名山」を制覇。高校2年のときに叔父の勧めでオートバイと出会う。全国各地をツーリングするだけに止まらず、モトクロスやトライアルのレースに参戦。1999年、モンゴル平原4,000kmを8日間かけて走るラリーに参加し完走。また、第14回世界ろう者冬季競技大会(主催:国際ろう者スポーツ委員会)に日本代表として出場するなど、障害をものともしないその行方は、ろうあ者のみならず多くの人々に希望の光を与えている。



サハラの砂は非常に細かくタイヤを捕られやすい。
体力、精神力が容赦なく消耗される。



大自然を相手に最高の覚悟、灼
熱の砂漠の中を次のチェックポ
イントに向けてひた走る。



フランスはアラスのスタート地点。
積年の夢のスタートだ。



一度は主催者のマシン回収トラックを拒否したが、
打つ手がなく勇気ある決断を。この時に今回は完走
との意思が固まった。

(柏町)

柏町、砂川七番の有形文化財「蔵館」当主にして、段ボール・オブジェを手掛ける現代アートの気鋭。絵の修行のために十代で渡仏。15年間、異郷の地で過ごした後帰国。蚤と共に生きてきた砂川の歴史が染み込んだこの「実家」を自身のアートの発信点として活動を続けている。昨春秋にはNYで個展を開催。テロに沈みきった市民に安らぎを与えた。幕末から明治初頭にかけて建てられたという「蔵館」は、コンサート等にも提供され、今や砂川文化の新たな拠点となっている。

(於・蔵館/撮影・細江英公)

東風

まずもって、5月6月の合併号になってしまったことを、お詫び申し上げます。5月号の刊行が間に合わなかったことに対しては、読者の方々からお問い合わせやら、ご心配をいただき恐縮の至りでございます。ようやく編集部も元に復帰、この夏は旺盛な取材活動をしていこうと誓いあっているところでございます。引き続きわれらが「月刊えくてびあん」のご愛読を伏してお願ひ申し上げます ◆名にし負う「バリ・ダカール」ラリー、世にいう「バリダカ」に挑戦した錦町の田村聡さんの心意気を感じていただけただろうか。ただでさえ至難の冒険なのに、聴覚障害というハンデをもちながらの挑戦。常人の志を逸するものである ◆都会の真ん中をオートバイで走るだけでも躊躇うところ、砂漠をいくつも越えてゆく走行に拍手を送りたい。フランスとスペインの国境、ピレネー山脈を越えるだけでも大事である。障害者でのほほんと生きている人はいない。両足のない人がマラソンに挑戦し、ついにはアメリカ大陸を走破した話を聞いたことがある。「自分を見詰める」あるいは「天命を聴く」志に関しては常人の及ぶところではないのではないか ◆夏書して わが身の瘦や えくてびあん

【第三次えくてびあん同人】
編 纂 大久保清志 / 小林康史 / 杉山清純 /
芳賀敏博 / 山田五郎
デザイン 油田隆典 / AMNET DF
写 真 五来孝平 / 提供 / 田村 聡

えくてびあん 5/6月号
第20巻 通巻214/215号
平成14年6月1日発行
発行 えくてびあん編集部
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL 042-528-0082 FAX 042-528-0065
編集人 立井啓介
発行人 瀬尾勤三
印刷 (株)大廣社

無断転載を禁じます。

Topics トピックス

立川発、個性的なデパート 「フロム中武」が40周年



▲開店当時の「中武デパート」(現・フロム中武)

北口駅前の「フロム中武」が今年、創業40周年を迎える。昭和37年5月、「武蔵野の中心たらん」との願いを込め、立川の名士、故・中野喜介氏により創業された「中武デパート」は、いわば商店街がそのままビルに入ったショッピングセンター形式。その形態は当時としては珍しく話題を呼んだという。昭和59年には内外装をリニューアル、名称も一般公募によって「フロム中武」と改められた。現在、7階建ての建屋に服飾、雑貨、書籍などのテナント60店が営業しており、個性的な専門店を集めた地域密着型のデパートとして老若男女、幅広い年齢層の街の人たちから支持されている。40周年を迎えるにあたり、三代目社長・中野裕司氏のもと、様々なイベントの企画が進められているようだ。余談だが、フロム中武のイメージキャラクターの名前は「フービー」と云う。

フェアレを望む小さなギャラリー 月一度の音の贅沢

曙町二丁目の菊屋川口ビル3階にある「マーレ」(イタリア語で「海」という意味)は地域に密着し音楽やアートに触れる機会や場を提供するために真如苑(柴崎町)が開設した小さなスペース。ここを利用して4月より、さまざまなジャンルのアーティストを招き、月一回のミニコンサートが開かれている。20人ほどで一杯になる小さな空間だが、ステージとの距離が近く、アーティスト達の熱気が直に伝わってくるようだ。6月14日(金)午後12時10分~13時にはフルートとピアノのデュエットが奏でられる。午後のひととき、上質な音楽にひたってみてはいかがだろうか。また、マーレラウンジの隣にあるギャラリー「ぼると」も写真やアートの展示スペースとなっており、誰でも気軽に立ち寄れる場となっている。

(詳しくは「マーレ」Tel. 042-521-6201まで)



真味百撰 手打ちぎょうざ工房

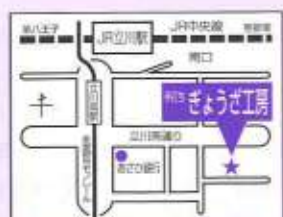
●柴崎町3-11-25 ●522-4770
●営業時間 13:00~17:00 (お持ち帰りのみ) 17:00~22:00
●日曜・祝祭日定休
●カウンター122席、離れ座敷8席・2室 ●Pなし

この食感新鮮 秘密は餃子の皮にあり

餃子といえば、食卓のサイドメニューと思われがちだが、この店の餃子は十分に主役となり得るだろう。その秘密は手作りの皮にあった。店主の古賀茂さんは、皮の材料である強力粉と薄力粉の割合をその日の気温に合わせて調節している。これをじっくりコシが出るまでこね、さらに一晩ねかせた後、めん棒を使ってひとつずつ延ばしていく。店名に「手打ち」と冠しているのは、この工程を踏んでいることを意味している。手間暇かけて作られた皮は弾力性に富んでおり、しっかりと餡(具)を包み、一切の旨みをギュッとその中に封じ込める。皮はまた、モチモチとした食感となめらかな喉ごしを与えてくれる。餃子の本場・中国ではそれぞれの家庭が手づくりの皮で思い思いの餃子を作っている。家庭の数だけ餃子の種類があると云っても過言ではないだろう。「ぎょうざ工房」の餃子は、大陸から引き揚げてきた古賀さんの母直伝の味だ。皮と餡の絶妙なバランス、ゆで餃子のツヤツヤとした輝き、しょうゆ仕立て、味噌仕立てそれぞれが持つ上品な味をご堪能いただきたい。



お試しコース (ゆで餃子5個、焼き餃子3個、蒸し餃子3個) 1,200円
ゆで餃子(5個) 480円
デザート餃子(チョコバナナ) 480円



34 30さんの 独断毒語

棄てる

いつの時代も「生きづらい世」かも知れませんが、最近では経済、政治で混迷を深めている日本、などと大上段に構える必要はない。原因は己がうちに在り、と最近気がつきました。冷静に己がうちを眺めてみると、こ、ろを汚しているものが三つある。虚栄心、自尊心、劣等感。この三つであります。さらに見詰めつづけると、一番の悪玉は「自尊心」で、虚栄心と劣等感がその後を追従しているような気配であります。——そうか、自尊心さえ棄てれば、わがこ、ろは澄むわけか。思いついたのが、ちょうど八ヶ岳の山麓にある八千穂村のヒュッテへ週末に行くところでした。八千穂村へは中央本線で小淵沢で小海線に乗り換え。八ヶ岳山麓をのろのろ走るローカル線で、こんなにゆったり走る車窓からならわが「自尊心」も棄てやすくだらうと考えたわけのものであります。小海線のどの辺りで棄てたらよいのでありましょうか。「野辺山」あたりはどうであろう。あそこは日本の鉄道のなかでも最高地点だし、わが自尊心もさぞ満足であります。——と、ところが、驚いたことにあそこは自尊心の溜

まり場らしく、幾人もの自尊心がうようよとしている。そういう眼で見ると、見えてくるのです。あ、皆さん、苦しくなると私と同じような結論に達し「自尊心」を棄てにくるものなの。しかし、考えようによっては、自尊心といえどもわが分身であります。多少の愛しさが伴うのも無理はありません。虚栄心と劣等感の自家来りなものですから、同行するかどうかは分かりませんが、彼らの自由意志に任せることにいたしました。思いきってわが自尊心を取り出し、車窓から

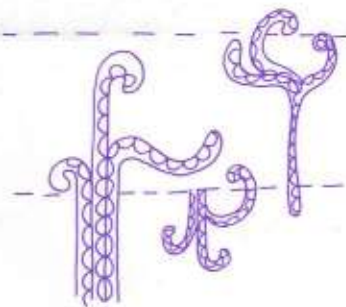


イラスト: 藤 幸子

投げますと、のろのろローカル線とは云え、列車のことですから、すぐに消え去ってしましました。ただ、棄てた瞬間にキヤットというような悲鳴を聞いたように思います。少し気がさしましたが、我が身はこ、ろなしか軽くなったようであります。ヒュッテで一泊して、翌日、茶臼岳から横岳を愉しみ、快適なトレッキングでありました。驚いたのは、我が家にたどり着いて玄関の扉を開けた途端であります。なんと、わが自尊心が先着で、帰っているではありませんか。元気な声で、——お早いお帰りで。などと囁く始末です。あ、元の木阿弥であったか。考えてみればこんな簡単な方法で「自尊心」が棄てられれば、何方も苦労はさされていなくて済みます。もしかして、私の住んで居る東京都と小海線が地続きのために簡単に帰還なさったのかも知れない。北海道が沖繩あたりまで行けば「自尊心」の奴め、泳法を知らないであろうから本州に入ることは不可能であります。が、寂しくなって他人様のこ、ろに棲みついてしまつたら、ご迷惑か。(やまだ)らう・詩人

立川と多摩地域が
もっと楽しいホームページ

多摩ではこ ネット

http://www.tamatabako-net.no.jp/

多摩ではこネット編集部
〒190-0012 立川市曙町3-4-3 武蔵ビル2F
tel 042-548-9606 fax 042-548-9609
e-mail message@tamatabako-net.no.jp

常楽我浄

真如苑提供番組くじよう56くじよう

スカイパーフェクトTV 216ch、マイテレビ 84ch

土 曜 午前9時~9時15分
午後7時15分~7時30分
再放送/火曜 午前9時~9時15分
午後7時45分~8時
放送時間は予告なく変更する場合がございます。

立川に育てられて六十六年

真如苑

柴崎町1-2-13 Tel. 527-0111(代)

立川産の 朝採り野菜を 食卓へ

5月~9月 12:00~18:00
10月~2月 12:00~17:00
休日 日曜・祭日

J.A.東京みどり 幸町直売所
〒190-0002 立川市幸町1-14-1
Tel 042-536-2439

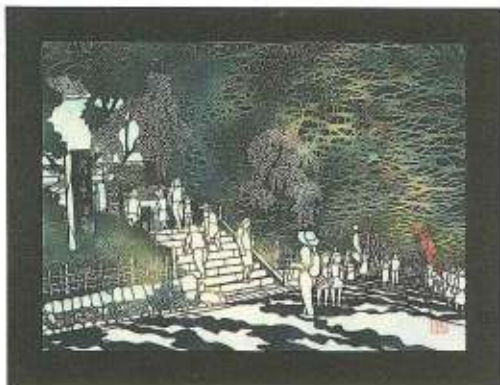
デジタルえほん メモリーブックにどうぞ...

ミッキーや
キティちゃん
と一緒に...!!
あなたの
写真と名前が
絵本の中に入ります。

PLANNING・DESIGN・PROCESS・PRINTING
株式会社 042-527-1911
〒190-0022 東京都立川市曙町5-17-13
FAX 527-1949
E-mail dkoyas@nifty.com

いつも、旅

型染版画家・田中清の世界 ⑩



多摩の新景より
『深大寺周辺』
(調布市)



『瓦屋根』

瓦は二十年ほど前、振り返ってみれば私自身が一番アラが乗っていた頃の作品です。畳、柱、障子、瓦を日本人の軸としてとらえていた時期がありました。瓦は産地によつて材も異なり、色艶にも変化がありますが、ときに崇高な彩を放つて圧倒するものがあります。実は『瓦』は二連作で、片方は崩壊寸前のものでした。完成されたもの、それに壊れゆくものに惹かれる両面をもっていたようです。